

## 「舌の上の牡牛 Βούς ἐπὶ γλῶσση」について

鈴木 敦也

アイスキュロスの「アガメムノン」の冒頭、物見の男独白中の「大きな牡牛がわが舌の上に乗ったようだ」(βούς ἐπὶ γλῶσση μέγας βέβηκεν) という比喻について、かつて私自身が演劇学校での実技の時間にさりげなく本読みが進んでしまったので、この部分的確な解釈を徹底的に掘り下げて議論しないで過ごしてしまったことを悔やんでいる。その後このフレーズと再会したのは十二年を経て第一回ギリシャ国立劇場の本邦公演が決まって、文化財団から台本の邦訳を委嘱された折りで、このときは的確なイメージというより誇張した表現と受け止め、さらっと訳してしまったが、つき詰めることなく曖昧にしてきたことを恥じている。尤も、この部分は、下っ端の下僚のぼやきであり、嘆き節であって、今から四十年も前、話の読めぬ上役の下で苦勞していた私の心理状態と共通していたため、この部分での現代ギリシャ語訳を何度も音読してすっかり暗記してしまったものである、あの頃から茫茫四十年。

(「アガメムノン」の中では、クリュタイメストラがイリオンの城を落として帰還したアガメムノンを、通路に敷いた紫の敷物の上を通して館の中に招き入れ、『海がある――その海をだれが干しつくせるか、その海は噴き出す深紅の液で衣を染める紫貝がいっぱいに潜んでいる』と述べる箇所を、私は最も不気味かつ鬼気迫るものと思うし、高名な俳人の「水枕がばりと深い海がある」だったかの句をも連想させて深いものがあると見るが、冒頭の物見の男の独白は全般的なドラマの予感を伝えても、まだ緊迫感は少ない。)

さて、問題は前五世紀当時の同時代人はこの表現をどのように捉え、意識していたのだろうかということである。プルタルコスが述べているように、テセウスが牛を刻印した貨幣を鑄たことから、「牡牛」は貨幣を意味することになった。初めは

慎みの限度を越えて放言した者が舌禍に対する料料として払う罰金、そこからまた諺的に「口止め料」としての意味も持つようになったというが、このアイスキュロスのテキストとは無関係であろう。それにアトレウス家の屋上で徹宵して物見する男が「銭が自分の口を塞ぐ」とか「沈黙を守るために買収された」と独白しているわけでもあるまい。

クリュタイムストラの家来は確かにはっきりとものを云うことを怖れており、恐怖がかれの口を封じさせるのである。あたかもアイスキュロスの同時代人が自然界で目にし得た最も重い動物である牡牛、その牡牛の非常に重い蹄で踏みつけられるように口の動きが封じられるというわけであろう。牡牛のイメージについてはとりわけ、アイスキュロス以前にテオグニスもその視覚的描写でこれを確認しているようである。

そして、また「強壯な牛がわが舌頭に乘ってきた」、「大きな牛が口中に入ってきた」等のヴァリエーション、類似表現がメナンドロス他後代の喜劇作者等によっても、いろいろな機会に用いられているようである。